

(1)

早稲田大学教授 坂上 桂子

2024年パリ五輪・パラリンピックが間もなく始まる。今年は「印象派」の第1回展が1874年に開かれてから150周年記念の年でもある。五輪ではセーヌ川

ビュシーヌ大通り」。印象派の最初のグループ展会場となった場所から見下ろした風景を捉えたものである。

はじめ、パリの各所が会場となるが、印象派の画家たちと、19世紀の都市パリをめぐってみよう。

◇

クロード・モネが描くのは、「カ

幅の広い直線的道路、整然と並ぶ街路樹、道路わきの大きな建物が目にとまる。ナポレオン3世の構想に基づき、セーヌ県知事オスマンが進めたパリ大改造により出現した新しい景観だ。かつてのパ

リは、狭くて暗い道が入り組み、不衛生な環境を生み出していたが、オスマンの道路整備により、明るく風通しのよい街へと次第に生まれ変わっていった。

モネが見ているのは、その代表的街並み。大勢の人であふれる、活気ある様子がよく表現されている。小さなタッチで、簡潔に表された通行人。もはや大都市では、人びとは豆粒のような存在でしかないようだ。(73〜74年ごろ、油彩、カンバス、80・3×60・3センチ、ネルソン・アトキンズ美術館蔵)

モネ「カピュシーヌ大通り」



ユニフォトプレス提供

早稲田大学教授 坂上 桂子

19世紀パリで、大通りとともに整備されたのが建物。オスマニア様式と呼ばれるアパルトマンは同じ高さ、デザインで統一されている。これが今でも街の景観を統一的に保っている一番の要因だろう。建物の特徴の一つは鉄のバルコニー。曲線によるデザインは、建物のアクセントになっていて装飾的役割も果たしている。ここから街を見下ろすのは新しいパリの楽しみ方だった。

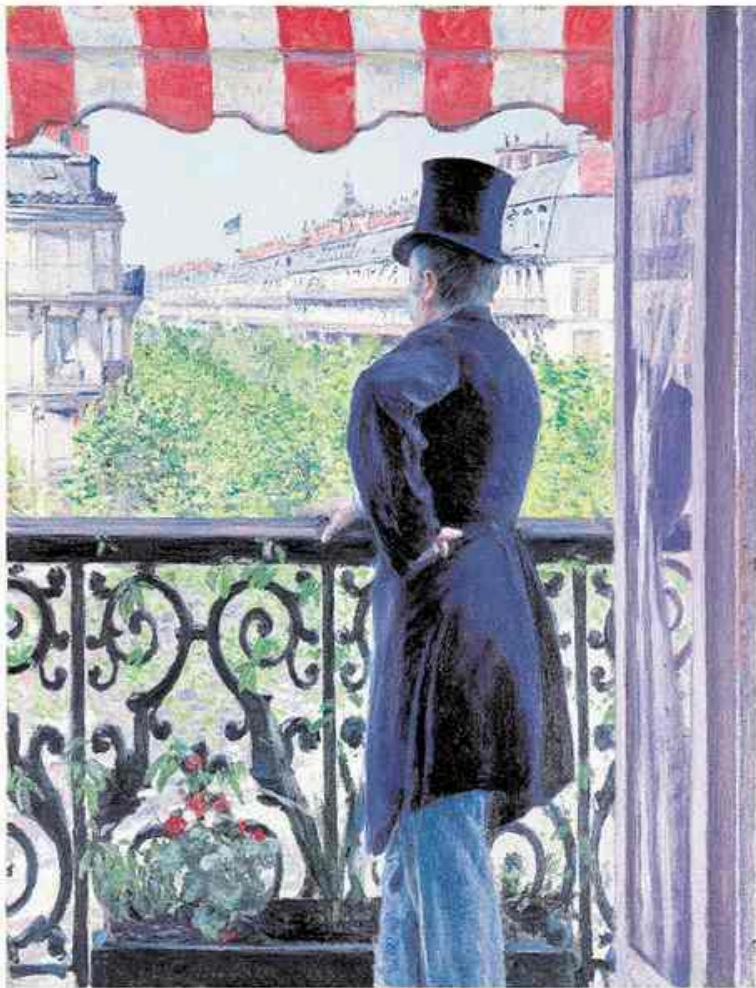
前回とりあげたモネの絵でも、バルコニーから眼下をのぞく人物たちが右手に描かれていたが、ギユスターヴ・カイユボットの絵では、バルコニーからオスマン大通りを見晴らす男性の姿が大きく描かれている。男性は画面中央から少しずれて立ち、この絵の鑑賞者

に、一緒にパリの街を見るよう誘っているのだろう。美しいデザインのパルコニーの向こうには、同様のバルコニーが付いた建物と街路樹が、統一感のある立派な街並みを形成するのが見える。男性は私たちに、新しいパリを誇るかのようにうた。

今年、パリ五輪では各競技が街中で繰り広げられるという。バルコニーから多くの人たちが見物するものと思われる。(1880年、油彩、カンバス、117×90センチ、個人蔵)

個人蔵)

カイユボット「バルコニーの男性、オスマン大通り」



ユニフォトプレス提供

早稲田大学教授 坂上 桂子

(3)



ユニファクトプレス提供

サイモン美術館蔵

パリ五輪ではセーヌ川で開会式パレードが行われる。選手は川を船で行進し、観客は両岸から観覧する。セーヌ川沿いの地区は世界遺産となっており、ルーヴル美術館など歴史的建造物が並ぶ。これらを見ながら進む水上パレードは、パリの都市景観を見る楽しみも提供してくれるだろう。

セーヌ川両岸の整備は、19世紀パリ大改造において最重要事業の一つだった。オーギュスト・ルノワールの絵にはその様子がよく捉えられている。画面中央に見えるのがポン・デ・ザール。「芸術橋」の意味をもつこの橋は、金属製のアーチが特徴的で、歩行者専用とあって今では多くの人で賑わうこととで知られる。画面奥には学士院の円屋根、対岸にはシャトレ劇場が見える。絵では川岸にちょうど遊覧船が着き、人びとが降り立つ遊歩道は明るい光に照らし出されている。

大改造以前、セーヌ川沿いには建物が建てこみ、川へは垂直的にアクセスする道しかなかったが、川に並行する道の出現は、川沿いの散歩という新たな楽しみを都市生活者にもたらした。(1867・68年ごろ、油彩、カンバス、60・9×100・3センチ、ノートン・

早稲田大学教授 坂上 桂子

(4)



トロカデロの丘は、エッフェル塔を眼前にパリが一望できる観光名所で、五輪では開会式はじめ多くの競技会場となる。

エドゥアール・マネがこの絵で描いているのは、トロカデロの丘からエッフェル塔が建つ以前のシヤンド・マルスを見渡した風景。万国博覧会開催時の様子が捉えられている。1867年の博覧会は史上最大の規模を誇った。画面では背景に会場が描かれるが、マネの視線はむしろ手前にいる人々に向けられている。兵士、馬に乗る女性、話し込む人たち、犬を連れた男の子などが、活気ある都市風景を構成している。マネ自身は印象派展に参加していないが、現代生活を描写する鋭い視点が印象派を導いたのだった。

画面中央奥に目をやると、ナポレオンも眠るアンヴァリッドのドームが遠くに見える。シヤンド・マルスはかつて練兵場だったことから、ローマ神話の軍神の名にちなんで「マルスの野」と名付けられた。パリができる以前には、ローマ軍とガリア軍が戦った歴史的な場所でもある。今年のパリ五輪では、平和の対戦がこの地でもくり広げられる。(67年、油彩、カンバス、108×196センチ、オースロ国立美術館蔵)

早稲田大学教授 坂上 桂子

(5)

ベルト・モリゾが本作で描くのは、前回とりあげたマネの絵の舞台になっていたトロカデロにほど近い高台からの眺望。遠くに見えるアンヴァリッドのドームが位置関係を明らかにしてくれる。ここではセーヌ川の流れや、その向こうにあるシャン・ド・マルスの広大な空間がよく捉えられている。

モリゾは女性が画家になるのが難しかった時代に活躍した女性画家の一人。第4回展をのぞき印象派展全てに参加している。この絵はモリゾ家の邸宅のテラスで制作されており、モデルの女性は2人の姉イウかエドマと思われる。黒いドレスにピンクの日傘がとてもお洒落だ。後ろ姿の子供はイウの子だろう。柵に手をかけ向こうをのぞき込む姿が愛らしい。



モリゾの作品の大半は身近な家族や家庭の情景がテーマで、当時の女性の生活が垣間見える。一方でそれは女性の生活圏が、男性とは異なりもっぱら家庭のなかに閉じ込められていたことを示す。パリ五輪では、モリゾが見たトロカデロからシャン・ド・マルスにかけての地で多くの競技が行われる。女性たちの活躍を大いに期待したい。(1872年、油彩、カンバス、61×50センチ、石橋財団アーティゾン美術館蔵)

モリゾ「バルコニーの女性と子ども」

石橋財団アーティゾン美術館提供

美術館蔵

早稲田大学教授 坂上 桂子

(6)

パリの街中で開催される五輪では、各所でエッフェル塔の瀟洒な姿がその背景の景色を彩ることだろう。

19世紀、オスマンの大改造により、高さとデザインの揃った建物で構成されるパリの旧市内には、

系の色で街に馴染み、日没後は華やかにライトアップされて、1時間1回、シャンパンフラッシュできらきらと光る。東京のようにネオンがない街では、その存在感はひときわ大きい。

現在でも高層ビルがほとんどない。そのためエッフェル塔はパリの多くの場所から望める。昼は茶

エッフェル塔は1889年3月、万国博覧会に合わせて完成した。ジョルジュ・スーラは完成を待ちきれないかのように、すでに

1月頃、その姿を捉えている。橋を縦にしたような鉄の構造物は、無骨なものと当時多くの人がひとから非難された。だが画家はむしろ現代的な美に惹かれたのだろう。軽快なタッチで置かれた色とりどりの小さな点が、塔のシルエットを描き出す。スーラは86年、最後の印象派展に参加し、「点描画」で注目を浴びた。それはすでに印象派から展開した次世代のアートの到来を物語っていた。(1889年、油彩、板、25×15センチ、サンフランシスコ美術館蔵)



ユニフォトプレス提供

(7)

早稲田大学教授 坂上 桂子

エッフェル塔と並び、パリの代表的ランドマークのオペラ座。19世紀のパリ大改造において、ナポレオン3世がとくに力を入れて整備したのがオペラ座とその周辺地域だった。1875年に開業、ガルニエ宮として知られる建物は豪華絢爛、オニキスや大理石がふんだんに使われ、巨大なシャンデリアや多数の彫刻、絵画で飾られていた。エッフェル塔や駅舎等が鉄やガラスといった簡素な工業品によるのとは対照的だ。

カミーユ・ピサロは本作でオペラ座周辺の再開発地区を捉えている。画面奥のオペラ座を起点に、まっすぐに伸びた道路、立派な建物が描かれる。手前の広場には、都市整備の一環でパリの街角に設けられた噴水が左右に見える。馬車や人が行き交う街は活気づき、朝の陽光に照らされ輝いている。

ユニフォトプレス提供
ここではオペラ座はごく小さくしか描かれておらず、画家の関心は整然とした都市景観に向けられているのがわかる。今年のパリ五輪は街中が競技会場となっているため、似たような風景を各所で目にするだろう。

ピサロは印象派展すべてに参加した唯一の画家で、晩年はパリを多く描き、パリへのオマージュを表している。(1898年、油彩、カンバス、66×81・9センチ、フィラデルフィア美術館蔵)

ピサロ「オペラ座通り、朝の陽光」



早稲田大学教授 坂上 桂子

(8)

コンコルド広場は、ルーヴル美術館からエトワール凱旋門に続く道の中間地点に位置する。広場自体は18世紀に造成されたが、19世紀になるとエジプトから贈られたオベリスクや彫刻で飾られた噴水が2つ配され、今日見られるような情景になった。

エドガー・ドガが描くコンコルド広場には、しかしながらこれらのモニュメントは描かれていない。背景に隣接するテュイルリー公園の端が、わずかにこの場所を示しているだけだ。
かわりにドガが描いたのは、画家の友人で貴族のルビック一家。ルビックは葉巻をくわえ、傘を抱え、腕を後ろに組み、通り過ぎる。娘たちと犬も描かれるが、その視線はばらばらだ。画面左端に半身が見える人物もドガの友人アレウイ。

提供
スプレッ
フォト
ユニ

これらの人物たちの合間から、何もない広場の空間がのぞく。ドガはモネたちが使った小さなタッチを使うかわりに、カメラが偶然捉えたような瞬間的イメージを描くことで「印象」を表現したのだった。

パリ五輪ではスケートボード、自転車のBMXフリースタイル、バスケットボール3人制、フレイキンといった比較的新しい競技がコンコルド広場で行われる。(1875年、油彩、カンバス、78・4×117・5センチ、エルミタージュ美術館蔵)

ドガ「コンコルド広場」



早稲田大学教授 坂上 桂子

パリ南東に位置するベルシー地区。パリ五輪では、フランス最大の屋内競技施設ベルシー・アリーナで、バスケットボールをはじめとする各競技が行われる。近くに

は、19世紀のワイン倉庫群を利用した施設で、歴史的建造物に指定されている。ポール・セザンヌが本作品で描くのは、そのベルシー地区。労働者、荷馬車、クレーン、蒸気船等が描かれ、今まさに開発中の地であることがよく伝わる。この絵は、印象派の画家でセザンヌの友人アルマン・ギョーマンの

ユニフォトプレス提供

描いた「ベルシー河岸」とモチーフの配置や風景の細部までがほぼ同じとなっており、セザンヌは実景を目にして描いたのではなく、ギョーマンの作品を模写したと考えられる。

一方でセザンヌの絵はギョーマンよりもタッチが大きく目立ち、リズムカルに刻まれ、作風は異なる。ブルーとオレンジの対比も効果的だ。この絵は印象派のスタイルを超えて、次世代のポスト印象派の画風をすでに見せていよう。(1876〜78年ごろ、油彩、カンバス、59・5×72・5センチ、ハンプルク美術館蔵)

セザンヌ「ベルシーのセーヌ川」



早稲田大学教授 坂上 桂子

(10)

モンマルトルはパリの北に位置する小高い丘で、眼下にパリ市中心部が広がる。19世紀後半、いまだのどかな風景を見せていたこの地には、印象派ら多くの画家が住むようになった。フィンセント・

ファン・ゴッホもその一人。ゴッホがオランダからパリへ出てきたのは1886年。第8回最後の印象派展が開かれた年で、弟のテオとモンマルトルのアパルトマンに住む。本作は部屋の窓から

パリの街を眺めて描いたもの。パリに着いた当初、ゴッホは暗い色調で描いていたが、次第に印象派の影響を受けて明るさを増す。ここでは点描も見出せる。最後の印象派展で、点描画法を創始したスーラの絵を見たのだろう、小点が生き生きと飛び交う。画面の遠景中央にはノートルダム大聖堂の塔が配され、いかにも信仰心厚いゴッホらしい。



ユニフォートプレス提供

ゴッホ「テオのアパルトマンからの眺め」

パリが生み出す新しい芸術は、その後もピカソら多くの画家たちを惹きつけるようになり、パリは20世紀初頭にかけて国際的に芸術の中心地となる。印象派展が始まってから150周年の年に開かれるパリ五輪では、彼らが活躍した時代にも思いを馳せたい。(1887年、油彩、カンバス、45・9×38・1センチ、ファン・ゴッホ美術館蔵)